

三十二、年頭雑感

古い年が去って、念仏とともに新しい昭和十二年が来た。午前四時起床、仏前聖勤、皇居伊勢大廟遙拜式、祖先墳墓地遙拜などすませて、一同年頭の挨拶をなし、干柿とお茶を頂きつつ、はやみ法の話が出る、ありがたい感想が出る。だれの顔にも喜びがあふれる。本部で年を越した者十六名。ほかに参列席五名。

至って悟れる智者には、年末年始といえども、平素と変わることもなく、一切のことみな平常だそうである。しかれども、朝の空の美しく、夕べの西の麗しきがごとく、凡夫にとつては、年頭年始もまたおのずから深い意義がある。

われらは、お念仏の中に、昭和十二年を迎えさせていただいた。本年またみ法を求めて同胞とともに歩ませていただくありがたい年である。いかなる苦悩が来ようともありがたい年である。

思えば私もいつしかに四十三歳になった。時の流れの速きこと、まことに「白駒の隙をすぐるが如し。」ではあった。しかし短いようでも、四十二年の歳月は長いものである。この間何をしたか。成就したる何ものもなく、ただ業道のままに流れて来たのではなかったか。ただ残るものは南無阿弥陀仏のみにておわします。

過ぎ来し方を振り返れば、その時その時は、力一ぱい生きてきた気でいるのに、船の通った後の波のごとく、四十年のすべては、ただ悪業よりほかなき生死の海の、煩悩の波だけではないか。しかるにただこの煩惱業道の歩みの帰結は、今現に、唯一絶対の大悲念仏のうちに摂取されており、不可思議にもまたありがたききわみではないか。

わが二十年昔の不善無智を言いて、世に流布宣伝してくれる人がある。そのとおりである。何をか言いてこれを弁駁しよう。わが十年昔の不徳無学を言いたてて、嘲笑罵倒する人がある。そのとおりである。何をもってこれを弁解するの余地があるう。わが五年前一年前の愚悪の行歩を暴露して、攻撃し、非難する人がある。われは沈黙してそれを聞くであろう。そのとおりだからである。巷に裁く人の声に聞き入る時、たといそれが過去の私の形の上の真実ではなくとも、なんで私の内心にないと言えようぞ、一切衆生の惨憺たる相はそのままわが相ではないか。一年一ヶ月、いな昨日までのわが過去のすべてが、これ業報のそれではないか。一時間、いな一分の前まで、さらに現前の念仏に内観されるもの、すべて、罪悪生死三毒の淵ではないか、無有出離之縁の深淵ではないか。裁かるべきである。大法を頂いて世に立つものは、特に裁かるべきである。裁かれるすべてがわれに悪業煩惱あればこそである。わが業のしからしむるところである。悪業なきところ無実の讒侮さえないであろう。

しかるになんたる幸であろうか。生まれてここに四十二年、如来大悲は、われをしてこの世にみ法を求めしめたまい、唯一絶対の真実教を廻向したまい、真如一実の功

徳宝海たる名号によつて、金剛不壊の大信海を獲得せしめたまい、住正定聚の身となしたもうた。

大聖釈尊に発したる真実教一河の流れは、七高僧、聖人、上人、億々の念仏の浄華を咲かしめつつ、今、現に悪逆のわれを召したもう。召して悪逆の上に念仏を廻向し、善悪浄穢なき本願大悲によつて悪逆を転じて不退転の身とならしめたもうたではないか。

み法の旅に発つて十有九年、あるいは如来わが一生をして、確かに念仏一道に終らしめたもうものか。わが本懐、わが歓喜、わが幸福、わが満足、これにすぎたるものがあるうか。今にしてわれ、まことにわれにむかつて、「汝幸福者よ。よくも聖人のみ教えを聞き、念仏する汝であつたことよ。」と憶わざるを得ない。

その昔、地位を得んとして得ず、名利を成就せんとして得ず、肩書ある人たらんとして得ず、人間的幸福を成就せんとして成らず、与えられたる身の上は、多くの宿業の鎖につながれ、地上の束縛に碍げられて、かかるものを成就せんとする青春は、身動きもならぬ重荷に包まれて、懊惱し煩悶し悲観せしめられた。しかるに、今にして憶えば、われはなんとたる幸であつたらう。もしかかる束縛なくて、五欲名利の求むるままに歩み得たならば、あるいは今頃は、それらの僅かを得たかも知れない。しかれども、われに念仏あり、聖人あり、無量寿経があつたであらうか。思つただけでも寒くなるを感ずる。

無量寿経なく、聖人なく、念仏なくば、われはついにわれの何ものであるかを知ることはできないであらう。凡夫は、われの正体を知ることよりも、砂上の楼閣のごとき幸福を求める。わが生くべき道を知ることよりも、空中の空華のごとき幸福を求める。不安はこの幸福の夢につきまとう。

如来の真実教は、わがすべての楼閣、空華、心内に生まれ出ずる八万四千のガラクタのすべてを一念に打ち砕いて、み光によつてわが真相を知らしめたもう。われにしてわれを知らずば、なんぞ生きる道があるう、歡びがあるう、道なき処に信心なく、安心なく、その他一切があり得ないであらう。

私は多くの人に会つたとともに、多くの人と別れた。しかし今も多くの人とともに生かされている。憶えば、別れた人の大部分は、私の不徳がその原因であつた気がするし、長い年月別れないで、ともに念仏一道を歩ませていただいたのは、すべて仏徳のしからしむるものであつた。だが、十年前より、五年前、五年前よりも今日と、わが周囲に集まりたもう人は、だんだんとより純粹な念仏の行者であるようである。より深い歩みを成就する同胞によつてとりまかれることはありがたくも尊いことである。

親鸞聖人は、この世には、み法を求め、念仏して、日本国土に大無量寿経の真実を立証し、日本国土の如来を、日本国土の上に顕現し具体化して、国土の燈明を掲げるために出で来たまうた方であつた。身をもつて如来本願に生き、生命を打ちこんで念

仏して生きてくださった。身をもって聖徳太子の恩徳にこたえ、その教命に順い、太子のご遺訓を、事実としてくださった。浄土より生死に還相する大菩薩は、卑湿の淤泥に蓮華を生ずるがごとく、凡夫煩惱の泥の中にあつて、衆生を開導して、仏の正覚華を生ぜしめて、まことに三宝を紹隆して、永久に絶えざらしむと言われる。聖人こそは、実に身をもつて、念仏の正覚華と咲いて、日本国土の一切の人の上に三宝を具体的ならしめてくださった方であつた。

念仏の子は、その聖人のみ教えに生きるものである。聖人の領解したもうた真実教を、聖人のみ教えによつて領解して生きる。念仏の子は、それが喜びのすべてであり、光のすべてであり、願のすべてである。またそうある人だけがわれらの同胞である。青年でも老人でも、智者でも愚者でも。

聖人のみ教えに生きるものは、けつして、近ごろ日本に流行するような迷信に迷わない。聖人のみ教えに迷信性、邪教性がないからである。たとい仏教中に許しているお大師さんに参つて現世祈祷するようなことでも、聖人のみ教えでは「千中無一」と嫌われ、雑行雑修として斥けて、なんらの功利的な我欲を入れざる、清浄真実なる如来心さながらの大信心に生かされる。それだけでも、念仏の人はだれも知らぬ幸を知つて生きる。

聖人のみ教えによつて育てられたものは、真実のみ光によつて、わが内心に巢食う煩惱悪魔、親に対する悪逆の魂、如来に対する誹謗正法の本罪、そうした内心のおそるべき心のみ光によつて深信信知するがゆえに、念仏の子の生活は、念仏の徳によつて、親に対しては孝となり、兄弟に対しては友となり、師弟道となり、夫婦道となる。如来は一切の道を無我の信の中に成就してくださる。

如来の前に、真に頭を下げた者は、必ず親の前に頭を下げる。信心の行者にして親不孝者たるを見たことがない。如来のみ光は、人間の胸中の一切の無明を破したもうがゆえである。悪逆も悪逆を懺悔して、真実本願海に帰入すれば、仏凡一体の徳に生かされる。

聖人の教えは、一切の自称善人、うぬぼれ賢人、虚仮賢善の人を転じて、悪人となし愚者となし大法に順じて、念仏の妙好華となしたもう。真に聖人の教えを聞いた人にして、かくのごとくならざる一人の人を見たことがない。不思議なるかな。

念仏有縁の道俗は、如来聖人よりたもうた最上最高の賜物である。離合集散は因縁による。一人をも所有すべきものではないが、たとい幾百千里を隔つとも、真の同胞は離れることはあり得ない。人間の煩惱の手を放したところ、同一念仏によつてつながる同胞がある。

私は多くの念仏の同胞を知つた。本年もまた多くの同胞に会わしていただくことであろう。これあるがゆえに一日の生には一日の喜びがある。

仏法僧の三宝は、無限の大宝庫である。大法蔵である。しこうしてかかる大法蔵は、浄土のみ名において、われらが前にその扉は開かれた。扉開かるるや、内より飛び出した無限の宝玉、しかもわれらはその二三を得たにすぎない。われらは、この厳肅なる無限の大宝海にむかつて合掌して立つたのである。

本年もまたこの法蔵の中より多くのものを頂戴するのであることを憶う時、まことに生きる日の幸を感謝せざるを得ない。み法の旅にある者にとつては、今日一日が、今月一ヶ月が、本年一年が、ただみ法を信証するために恵まれたことを感謝せざるを得ない。ただこの一生はみ法を求め、念仏することのために与えられたる一生である者にだけ、大法念仏はその生命となる。

み法に照らされざる生活はいかにもあらましである。散漫であり、不純であり、雑多である。雑多はそのまま悪なるがゆえに、聖人は『愚禿鈔』の毒薬対の説において「毒とは善悪雑心也。薬とは純一専心也」と仰せられた。さればまことにわれらは純一専心の歩みを成就しなくてはならない。われらの雑駁な歩みを如来によつて純一なるものにしていただかなくてはならない。

私はこの七八ヶ年が間、ただわれらが歩みを内へ内へと転じて、ひたすらに純化の一道を志してきた。そしてこの内部へ内部へと向けられた歩みは、かなりの成果をおさめてきた。しかし真にこれからである。これからも光明団をもつて、大衆へよびかけるのでなくて、内部へ内部へと深く歩みを続けてゆくであらう。

それでも人は増してゆくばかりである。来る人を拒みはしないし、逃げる人を追うては行かない。深山の杉が独り成長して、他の木に手をかけていないがごとく、だれもだれも自分独りで歩まねばならない。その一人の歩みが、しかしながら、同一念仏無別同故なるがゆえに多くの友を与えられるのである。

合掌せよ。手を出してはならない。

しかし私は、いかなる苦難にも堪え、迫害攻撃にも忍んで、金剛不壊の一道を堅持してたじろがない多くの同胞あるを憶念して、胸の熱くなるを感じる。同胞の護念証誠を合掌して感謝せざるを得ない。「私はどんな苦難の道でもいい。いかなる不幸の中でもいい、同胞のことを思うと。」胸の中からこみ上がる声がある。私は静かに、この一道を歩ませていただく、与えられたる今年も。